

## プラスチックゴミ問題について

高橋 司 たかはし・つかさ

弁護士。1963年生まれ。北海道大学大学院法学研究科修了。「高橋・白浦法律事務所」代表。

平成30年7月9日、コーヒーチェーン大手のスター・バックスがプラスチック製使い捨てストローの使用を2020年までに全世界の店舗で全廃することを発表した。同社の店铺数は全世界で28000箇所に上り、年間およそ10億本のプラスチック製ストローが使用されていることである。南米のコスタリカ沖で絶滅危惧種であるオリーブヒメウミガメの鼻にプラスチック製のストローが突き刺され、それを研究者が抜こうし、鼻から血を流しながら耐えているウミガメの姿の動画を私はユーチューブで簡単に見ることができた。

平成29年7月にアメリカ科学誌サイエンス・アドバンスに掲載されたローランド・ガイナー博士の論文等によれば、1950年ころから本格的に生産され始めたプラスチックのこれまでの累計生産量は約83億トンとなつており、そのうち廃棄されゴミになつたのは約63億トンにのぼるが、その中でもリサイクルされていない量は約57億トン、海に行き着きプラスチックゴミになつて漂っている量は年間1000万トンを

超えていると報告されている。平成30年8月6日付けの日本経済新聞の報道によれば、経済協力開発機構がプラスチックごみを飲み込んだ魚介類を通じて人間の健康を脅かすリスクがあるとの報告を行つた旨の記事が掲載されている。

さて、私たちの日々の生活に田縫を戻せば、ゴミを分別してゴミステーションに出す習慣は根付いており、コンビニなどでもペットボトルとキヤップを分別して出している。ペットボトルとキヤップは同じプラスチック製品と言つても材質が異なることからリサイクル過程が異なることが反映されている。そして、我が国のプラスチックのリサイクル手法は長年の技術開発によつて著しく進歩していると言われ、マテリアルリサイクル法、ケミカルリサイクル法、サーマルリサイクル法などの手法が取られている。その結果、我が国のプラスチックリサイクル率は統計上80%を超えると言われているが、実はプラスチック素材に生まれ変わつているのは全体の23%程度に過ぎず、その余りは燃やしたり、ガス化してエネルギーとして回収している

超えていると報告されている。平成30年6月に公表された環境省の「海洋プラスチック問題について」という報告によれば、我が国近海に漂着するペットボトル中、製造国別では太平洋側では日本製のものが多いという。なお、東シナ海や日本海側では中国製や韓国製などである。平成22年の統計ではあるが、我が国は、陸上から海洋に流出したプラスチックゴミの発生量としては世界で30位にとどまるものの、プラスチック生産量としては世界3位でありレジ袋の消費だけでも年間300億枚にもものぼつていることから、国内ではもつと効率的にリサイクル率をあげることができるよう、技術的にも採算的にも検討する課題は多いと思う。

ところが、プラスチックゴミ問題がさらに混迷を深めるのは、マイクロプラスチック、マイクロビーズといふ目に見えないプラスチック汚染の問題である。一人ひとりが冒頭あげたウミガメの動画をユーチューブなどで閲覧して自らの身近な問題として考えてほしいと思う。